

Title	ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む 太宰治『黄金風景』を例に：総括
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	多言語翻訳：太宰治『黄金風景』. 2012, p. 47-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32752
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読むー太宰治『黄金風景』を例に ディスカッション・ペーパー

大阪大学 講師 合山 林太郎

1. 「近代小説翻訳プロジェクト」について

- ・現在の阪大の日本文学研究室には、様々な国からの留学生が在籍している。
 - ・阪大の日本文学・国語学研究室が、伝統的に持つよいチームワーク。
 - ・阪大の近代文学研究（出原隆俊先生のご指導による）の伝統である精緻な小説読解。
- 多人数（多国籍の学生）で、議論や知識の共有を行いながら、日本の近代小説を翻訳するならば、日本文学の国際化、研究、教育、様々な面で効果があるのでは？

2. 作品選定の理由（『黄金風景』を選んだ理由）

- ・試験段階のプロジェクトであるため、短編・掌編小説に限る。
- ・文学作品を翻訳の対象とするが、文学研究者以外の読者も視野に入れる。
- ・“日本的”などの文脈で評価されることの少ない作品を選定する。

3. 作業実施状況

- ・2012年2月15日、同23日、3月13日の計3回、集合し、議論をしつつ理解を深める。
- ・語彙、文化・社会に関する議論および知識の共有が中心。太宰治作品の研究史などについては、最小限のフィードバックにとどめる。

4. 異言語の読者が感じるギャップ

- ・知識・モノレベルのギャップ（状況の認識に困難が生じる）
- ・人間関係に関わる制度・風習のレベルでのギャップ（登場人物の感情・思考の理解に困難が生じる）
- ・心情・倫理のレベルでのギャップ（作品への共感、評価に影響を及ぼす）

5. 日本人参加者（合山）の感想

- ・言葉のニュアンス、及び日本独自の慣習・風物に関する疑問が集中した。
- ・結末部分については、国や言語によって、評価や理解が異なることはないように感じた。
- ・「私」による語りの質について、十分に説明し得たか、また、各翻訳者が訳し得たか、という点が、やや気がかりである。（本作品の語りが訳出できているか？ また、語っている「私」はどのような人物か、という点について原作のニュアンスを伝えられているか？）
- ・誤読がもたらす作品鑑賞の可能性にも留意すべきである。

本ワークショップの前提

文学作品の理解や評価は、様々な要因によって異なったものとなる。たとえば、個人レベルでの感受性の違いや性差によって、異なる理解や評価が生まれる場合もあるだろう。ただ、このワークショップでは、できるだけ、翻訳対象となった言語、および、その言語を話す社会の文化や慣習によって生まれる（または生まれる可能性のある）理解や評価の違いに焦点を合わせ、議論を行う。